

JICA専門家に聞いてみた！ 世界について知る・考えるための授業づくり

JICAには、特定分野の専門性をもって途上国のプロジェクトに携わる「専門家」という職種があります。今回は、日本での教員経験を経て、専門家として途上国で活動されていた2名の方に取材をし、授業で国際理解教育・開発教育を授業に取り入れるヒントや、そのために大切な国際協力の視点を伺いました。

はじめに、日本の公立中学校と協力隊(理数科教師)経験を経てセネガルのプロジェクト専門家を勤められた金津信一さんに、授業のヒントを伺いました。

Q. 海外経験がなくてもできる、国際理解教育・開発教育とは？

教員の時には、出前講座や貿易ゲームなど体験型の授業や、JICA北陸・石川県の国際交流協会(推進員)の方にも相談し、協会に在籍している海外の方に教室でお話いただく授業も行いました。その時に感じたことは、

海外の話を聞いて終わりになってはもったいないということです。

教員自身が考える授業のねらいや、学校として期待していることを明確にして、**事前事後学習も含めた構成**をもっと練ることができたのではないかと感じています。

今あるリソースや枠組みをどのように活用していくかをよく検討した方が、より有効なのではないのでしょうか。

先生も生徒も、まずは**より多くの情報を得ることが大切**だと思います。今は海外に行かずとも有益なリソースもたくさんあるので、海外教師研修の報告会、各JICAセンター・JICA地球ひろばの教材や施設、出前講座、またNPO等の団体発行の教材なども活用するといいかと思います。



金津さん(写真右)

Q. さまざまな教科で国際理解教育・開発教育を行うポイントは？

ニジェールでの協力隊員時代、ペットボトルなどを使った簡易型の顕微鏡を普及させる活動をして、現地の方に喜んでいました。このような知識は日本の教科書で紹介されていることも多く、その際に先生が「途上国ではこのようなものがとても役立つ」というメッセージがひとことあるだけでも変わってくると思います。

つまり、現行のカリキュラムの中で、いかに、**授業者が国際理解教育や開発教育の視点をもって日々の業務にあたるか**が大切で、それ次第で柔軟に導入できると考えます。その視点やアイデアは授業者によって無数に生まれてくると思うので、**周囲の先生と視点を共有**することもお勧めします。

💡 理科や算数・数学における、具体的な授業アイデアを聞いてみました。

理科であれば環境や気候などの単元は導入しやすいでしょう。また算数・数学であれば、世界の言語や国のカリキュラム、教え方の違いによって数の概念が異なり、例えば筆算のやり方は国が変わると別のものになります。そこから国による筆算の違いや日本の筆算の成り立ちを探究型へつなげていくこともできます。ただし注意点として、必修事項以外のことを取り上げる際には、学習のポイントを明確にした上で、児童・生徒に追加の情報を提示するなどの工夫が必要です。

Q. これから国際理解教育や開発教育に取り組みたい先生方へのアドバイス・メッセージ

コロナ禍において、今現実には起きている社会問題をいかに自分の中で捉えるか、いかに行動するかが問われています。

「社会に対してどう行動すべきか」という開発教育の視点、さらに海外渡航が制限される中、オンラインで世界の人々とどうコミュニケーションをとっていくのか、そのコミュニケーションツールの使い方、人間関係のあり方といった国際理解教育の視点は、**今だからこそ考えるべきポイント**なのではないでしょうか。

十分に検討しなければならぬこれらの問いには、まだ答えが出ていません。**先生と子ども達が一緒に考え、社会をよりよい方向に変えていく**。それもダイナミックに転換できるいい機会なのです。

国際理解教育や開発教育を通して、より広い視点を持ち、他の国や地域が抱える課題を日本の課題と関連付けられるように、同じ地球に暮らす市民として、これからの国際社会の担い手育成のきっかけづくりの場を、ぜひ積極的に子どもたちに提供していただきたいと願っています。

■ 金津 信一さん (JICA人間開発部 基礎教育グループ特別嘱託)

数学・理科教員として公立中学校で計8年間勤務し、青年海外協力隊(理数科教師/ニジェール)に参加。教員退職後、在ベナン日本国大使館での勤務を経て、JICA人間開発部基礎教育グループのジュニア専門員になる。2018年よりセネガルの初等教育算数能力向上プロジェクトの専門家(指導科目:算数教育/業務調整)として、セネガルの小学1~4年生を対象とした算数学力の向上を目的に、パイロットモデル及び全国普及モデルの開発・普及活動に従事し、プロジェクト終了後の現在はJICA人間開発部にて、主にセネガル、ニジェール、ブルキナファソの基礎教育分野の案件管理を担当している。

新潟県の小学校教員を経て、プロジェクトの長期専門家として中米で勤務された西方憲広さんに、国際理解教育・開発教育において大切な国際協力の視点を伺いました。

Q. 専門家の仕事の中で感じた、途上国と日本との大きな違いは？

日本ではある意味「学校で能力をつけて、卒業後は仕事に就く」ということが当たり前のように捉えられています。しかし、多くの途上国では、たとえ大学を卒業しても就職先が見つかるわけではないという厳しい社会環境の中で、多くの生徒・学生が学んでいます。学校に行っても勉強を頑張っても、**将来の可能性は日本のように広がってはいない**のです。そのような中で、**学校教育に対する期待度や社会における機能に大きな違い**を感じました。



西方さん

Q. 世界を理解する・国際協力を考える上で大切なポイントは？

例えば多くの国で科学教育という科目がありますが、日本のような理科ではありません。学習内容が、日本の理科が網羅するテーマの他に、環境、ライフスキル、保健、農業などで構成されていることがあり、国によってはマラリアの予防法、安全な水やエイズについてなど、生きていく上での必須知識を含むこともあります。良かれと思って他の国に日本式理科を導入しても、これまでなかったことをやるわけですから、その分生活に必須な知識を獲得する時間が取れなくなり得ると**いう弊害も考えておかなければならない**と思います。

国際理解教育や開発教育では、主に途上国の様子を取り上げ、自分たちにできることは何かを考える活動もありますが、国際協力を考えるときには、**世界の中の日本や、そこに暮らす自分自身を俯瞰的に見る必要があります**。また、**現地の人々や彼らの生活も踏まえた上での最適解をどう見つけるのか**、ということを念頭に置いていただけたらと思います。


Q. 日本の先生方が国際理解教育や開発教育を行う際に大切にしてほしいことは？

日本の教育システムは世界の中でも奇跡と言えるほど、素晴らしいものだと思います。もちろん改善すべきことはあります。しかし、まずは自国の教育に誇りや自信を持って子どもたちに接してもらいたいです。忙しい日々の中でも、**自分たちの生活に目を向け、それに感謝する心を持ち、その上で世界を見つめることが大切だ**と思います。

このような感謝の気持ちがあって初めて、**違いを許容する思考、違いを普通だと思える感性につながる**のではないのでしょうか。

Q. これから国際理解教育や開発教育に取り組みたい先生方へのアドバイス・メッセージ

以前、出張で南米ボリビアに行ったとき、偶然かつの教え子が協力隊員として活動をしていました。「西方先生の話聞いたことがきっかけで協力隊に参加した」と言われたときは本当に驚きました。**間接体験であっても、たとえ今すぐに結果が出なくても、世界のことを伝えるのは重要な活動**なのだと感じました。できるなら、JICA地球ひろばのリソースや施設、あるいは貿易ゲームの活用など、実体験によって子どもたち自身が刺激を受けておくことがポイントだと思います。また大人も子どもも、自分自身に不満があっては、違いを許容することは難しいと思います。目の前のことばかりにならないよう注意し、物事を**相対化して見る目を育てることが大切**です。

 国際協力や専門員のお仕事を「ひとつの国の政策に関わるなど、できることがダイナミックで、こんなに面白い仕事はない。」と語る西方さん。西方さんがプロジェクトで策定に携わった教材は、中米だけでなく、日本にいるスペイン語圏の人びとのコミュニティでも活用されています。（詳しくは[こちら](#)）

■ 西方 憲広さん（JICA国際協力専門員）

新潟県で小学校教諭として勤務し、在勤中に青年海外協力隊（小学校教諭/ホンジュラス）に参加。その後、本格的に国際協力の道に進むことを決意し、大学院で国際学を学び、在籍中に在ホンジュラス日本国大使館で専門調査員として政務・経済協力などを担当。JICA専門家のアドバイザーを経て、2003～2009年と2016～2019年の二度、長期専門家として中米に赴任し、それぞれ中米5カ国（ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、ドミニカ、グアテマラ）の小学校教育、エルサルバドルの中等教育の教科書開発に携わる。現在も含め、日本での本部勤務時はJICA国際協力専門員として教育案件策定や評価、研修などを担当している。

国際理解教育や開発教育は、そのための授業時間を設けることもできますが、普段の教科学習においてその視点を散りばめることも価値のあるインプットになります。世界を相対的に見ることを意識しながら、周囲とも共有し、様々な教科でその視点を子どもたちに伝えることが大切なのだと感じました。

また、お二人とも「世界のことを自分ごととして捉えるためには“実体験”が重要」と仰っていました。そのツールとして、JICAのプログラムや教材もぜひご活用ください。

▼国際理解教育・開発教育に活用できるJICAのリソース・情報はこちら

[JICA教材](#) / [国際協力出前講座](#) / [実践事例・学習指導案](#) / [国内のJICA拠点](#) / [各地のJICA窓口（国際協力推進員）](#)